

第1章 由真ちゃんのミッション！！

大分県温泉市妄想町……架空の大分県屈指のリゾート地・乙女ヶ浦【おとめがうら】に、会員制の極秘リゾート温泉・乙女温泉がある。恋の女神コノハナサクヤ姫が祀られ、美肌効果があると言われるこの温泉に入れば、美人になれるばかりか、恋まで叶うとか、玉の輿に乗れるとか何とか、まことしやかにささやかれている。

乙女温泉の一画に、日本国防軍が極秘に管理している、極秘の療養地&温泉があった。そこは、一般の国民には知られていない、とんでもない所であった。

ちなみに……サクーシャ・えみしがお創りになられた日本国は、『大統領制』なんで、よろしく……年号は使いますけどね……(V`*)テヘツ

さて、運命の第二話の舞台は、この温泉地！！

この極秘温泉の端っこに、日本国防軍の軍人さんやその家族が利用できる区画もあって、特別な許可さえもらえば、政府関係者だって利用できる。

そんな謎めいた乙女温泉にて、新人慰安婦・山田由真の、『公式ミッション』が始まった。

「こ……混浴？ですか……」

恋する25歳・山田由真は、トマトのように顔が赤くなっていた。

「そう、混浴、である……」

生真面目堅物な石井長官は、サングラスをつけたまま、至極冷静に命令した。

ピンク色をしたふわふわのワンピースの由真に対して、長官は相変わらず、堅物なスーツ姿である。生地こそ英国製だが、ものすごく地味な灰色ゆえに、誰からも高級スーツとは見てもらえない。「ついでに……全身古傷だらけの身体も、洗ってもらおうか？」

「はわわわ……」

ドギマギして、まともに答えられない新人慰安婦。

「安心しなさい。この作品は、作者お得意の『ポルノ』ではない……厳格なBASEにおいて、アダルトコンテンツや、酒・たばこ・危険薬物の販売は、禁止されている。だから、我々もそれに従い、清く、明るく、逞しく、健全ある入浴を心がけねばならない……」

サングラスを外して、イケメンな素顔と、黄金の瞳を見せた。

その瞳……正式名称は、万霊眼【ばんりょうがん】と言う……これは、凡人を霊能力者に激変させる、やや強引なアイテムである。原材料は、特殊なガラス。

正隊員昇格試験に合格した者は、誰もが、装着を義務付けられる。視力はものすごく良くなり、人間に化けた妖魔や、壁際の幽霊などを、瞬時に見分けることが出来る。

老眼の心配もなく、暗闇でも本が読めて、気合いを入れれば、異性の浴場ものぞき放題だ。

で、長官や次官などに出世できたら、特殊中の特殊な『黄金の万霊眼』が与えられる。

いささか、人間らしさはなくなるが、それを上回るほどの凄い能力が手に入るの、幼年部の少年少女には、憧れの存在であった。

ちなみに……由真の場合、正隊員昇格試験に落ちた後、こっそりと装着を許された。だが、……あまり効果はなかったようだ。

「そ……そ……そうでございますか？石井長官。」

「そうだ……」

ブルブル震える由真に対して、至極冷静な石井 久【いしいひさし】長官。

「山田由真くん、本日のミッションは、『いやでも長官と混浴すること』ただし、私も、君にエロいことは、しない。」

「りょ……了解しました！！」

心の中で、由真はこっそりつぶやく。

(いやだなんて……むしろ、お金を払って、こちらからお願いしたいです……)

身長・160。体重・50。童顔貧乳太ももふとめの慰安婦は、恥ずかしさで下を向く。
一方、長官は身長が180で、推定体重80キロ。身長差は20cmある。
・・・この二人、上司と部下である以前に、ラブラブの恋人同士である。一般社会のオフィスラブと
言うか、ごく普通の社内恋愛(?)の末に、結ばれた。
知り合って6年目だが、恋愛関係になって、まだ日が浅い。二人の会話がぎこちないのは、その
為であろう。
「ちなみに・・・日本国防軍の温泉療養地には、『ペガサスの湯』『ギグナスの湯』『ドラゴンの湯』
『フェニックスの湯』・・・最後に『アンドロメダの湯』がある。」
「どええええええええ、ま・・・まるっきり聖闘士〇矢!？」
(はい、私が花の女子高校生のとき、大流行しましたよ!! Byえみし・幻のボケ!?)
斬新なのか古臭いのか、よく分からないネーミングを前に、長官はぴしゃりと言った。
「温泉のネーミングなど、我々にはどうでもよろしい。我々が使用を許可されたのは、美白&美容に
絶大な効果が期待される『アンドロメダの湯』だ・・・」
「はあ・・・まるでギリシャ神話ですね・・・」
「・・・ギリシャ神話であれ、北欧神話であれ、読者さまに受ければそれでいい・・・」
「そうです・・・か・・・?」
「受ければOK、受けなければ、即座にスルー・・・これが、えみしのスタイルだ。よく覚えておきなさい
・・・」
「了解しました。」
「・・・では、先に入って準備しなさい・・・私も、直ぐにそちらに向かう・・・」
言い終わるや否や、むつつりスケベ疑惑の長官は、悠々と立ち去った。

第2章 九州ブロック・・・極悪の面々・・・

20XX年・5月末・・・33歳のイケメン・石井長官は、ヒラ隊員のときに所属していた、『左遷の流刑
地九州ブロック』に、特別視察に来ていた。
九州ブロックには、ベテラン隊員の奥田次官(正式には准特等隊員)を筆頭に、特殊機動隊屈指
の、戦闘バカが粒ぞろいであった。

では、九州ブロックの主なメンバーをご案内・・・
ニックネーム 炎の生還者・奥田つばさ 169cm 92kg バリバリの戦闘親父。
てっぺん禿げをどうにかして隠したい、微妙な年ごろ・50歳。名実ともにNo1。
隊員番号は「M-11」号 ただいまナイショで交際中(一般人の19歳女子大学生)

ニックネーム 美貌の破壊王・紅 一樹【くれないかずき】 170cm 62kg
九州ブロックで一番の黒髪イケメン。性格は辛口。細身の剣豪。『華のG組』の一人31歳。
隊員番号は「G-1」号 上等隊員 九州ブロックの実力No2。

ニックネーム 攻撃の巨人・紺野 駿【こんのしゅん】 188cm 92kg
紅と同期。長身マッチョで温厚な性格・・・ただし・・・怒ると奥田より怖い。『華のG組』の一人で、やっ
ぱり一樹の恋人。31歳。隊員番号は「G-6」号 准上等隊員 実力No3。

ニックネーム 人体再生工場・高倉 蓮【たかくられん】 172cm 85kg
石井長官と同期のE組。医療班トップのゴリマッチョ。外科手術の腕は「BJさまクラス」だとか?ブ
ロックご意見番の33歳。上等隊員扱い。隊員番号は「E-12」号

ニックネーム 小悪魔な天使・花岡ゆきの(♀) 157cm 体重ナイショ!!
可愛い顔してかなり酒豪。高倉の恋人で、准上等隊員 美乳のセミロング30歳。
隊員番号は「H-18」号 九州ブロックのお姉さま。

これらのメンバーが中心となって、石井長官とその他大勢を、熱烈に歓迎した。もちろん、慰安婦・由真も・・・

「お嬢ちゃん、石井から話は聞いているよ・・・ほれ、レアグッズ・・・」

いきなり『福岡限定・マーメイドキャンディー』を、奥田次官、自らプレゼント。

「ああああああ、ありがとうございます！！！」

可愛い由真ちゃん、大喜び・・・

「じゃ、視察も終わったから、歓迎会！！今夜はBBQパーティーだ！！」

「おうっ！！」

血気盛んな隊員たちが、腕を振るって準備した。

人生初めての黒毛和牛に、ジューシーな野菜。新鮮な魚介類。泣きたくなるほど美味しいフルーツ、デザート、ついでに奥田手作りのアイスクリーム・・・

「おーいーすい～～～～ですう～～～～！！」

九州産のごちそうを、お腹いっぱい食べまくり！！ヒロインの由真は、感動に打ち震えていた！！「いやいやいや・・・ここは左遷の流刑地だけど、美味しいものなら、よそのブロックには負けないからな★」

九州ブロックの奥田次官が、人懐っこい笑顔で答えた。

「は～い、由真さん・・・鹿児島黒豚はいかが？」

ニコニコ美人の花岡、さっさとお肉を焼きあげる。

「おっと・・・熊本名物の馬刺しも、美味しいぞ？」

さりげなく、イケメンNo1の紅がしゃしゃり出る。

「薩摩焼酎のカクテル、飲まない？」

長身の紺野が、爽やかな焼酎カクテルをごちそうした。

「おいおい・・・俺の彼女に接待しても、臨時ボーナスは出ないからな・・・」

いつもの『私』を封印して、気さくな口調の石井長官が笑う・・・それを横目に、変態次官・橋本が鼻血を出す・・・それを見て見ぬふりをする九州ブロックの隊員たち・・・ああ、今夜は平和な夜である。

「いやいや、お前みたいな武骨長官に媚びを売るほど、俺たち、がめつくないぞ★」

「出世街道から外れた身の上だから、今さらね・・・」

奥田と紅が、ほぼ同時に苦笑い。

「それより・・・」

てっぺん禿げの奥田が、ちらりと橋本を横目で見て、

「・・・明日、橋本のバカを何とかするから、お前たち、二人でデートでもして来い★」

「はあ？」

ヒラ隊員に戻った気のする石井長官が、目をパチクリさせた。

「どどどど・・・どういことですか？」

いきなりどる長官に、肘鉄付きながらニヤニヤ笑う不良次官・奥田。

「どーもこーもあるかよ！！せっかく九州ブロックに帰郷したからには、温泉に入って、傷でも癒せって一ことよ！！由真ちゃんとさ！！」

「で・・・で・・・でも・・・」

「任務なんて、一日休んでも罰は当たらないよ！！とにかく、お邪魔虫のはっしーは、俺たちで足止めしておくから・・・」

「・・・そ・・・それ・・・なら・・・」

気分はすっかりヒラ隊員。元上官のおせっかいに、反論できない自分が居た。

「ひょー、それでこそ我が愛弟子！！じゃ、もう温泉は手配したから！！」

「・・・相変わらず、仕事が早いですな・・・」

舌打ちしながら、石井長官が笑った。

「・・・俺がヒラ隊員だった頃は、難癖【なんくせ】つけて書類の山に叩きこんだ癖に・・・」

「はーっはっは、今は紅と紺野をしごいているところ！！次の長官はあいつらかも！？」

「・・・パワハラ癖も相変わらずで・・・」

薩摩焼酎『KUMAKUMA』の水割りを楽しみながら、二人は、九州の星空を見上げていた。

第3章 乙女温泉・アンドロメダの湯

……で、場面は変わるよ、アンドロメダに……

慰安婦・由真はドキドキしていた。

「……ど……ど……どおしましょう……」

バスタオル一枚だけを身体に巻き付け、愛する長官の入湯を、今か今かと待っていた。

一応、BASEの皆さんの目があるので、ハレンチは御法度である。だがしかし、シチュエーション的には、どこかの桃色小説の様……気絶しないか気になるところ……

ちなみに、人生初の混浴は、新宿歌舞伎の某マンションの、少々狭い浴室であった。

そのとき……初めて目にした、傷だらけの身体……わずか18歳から、33歳の現在に至るまでの、強烈な戦歴……日頃から万霊眼を悪用しない、純情な由真だが、それでも、少しだけ涙ぐんだ。そして……なおさら、長官をいとおしく思った。

ガラガラガラ……不意にガラス戸が開き、石井長官が入ってきた。

胸に、真一文字の刀傷……腕・足・背中……その他の箇所に、戦うたびに増えていった傷痕が、由真の黒い万霊眼に、クローズアップ！！

紳士である石井は、しっかり、下半身にタオルを巻いている。

「……その……いいかな？」

照れくさそうに、頭をかく……

「は……はいっ！！いつでもOKです！！」

……アンドロメダの湯の側で、ささやかな恋物語が始まった……

ザザザ……緊張しながらお湯をかけ、ドキドキしながら声をかける。

「あ……熱くないですか？……お湯加減は？……あと……お……お背中……洗います……」

「……よ……よろしく……」

どことなくぎこちない二人……二人きり貸し切りの温泉。かけ流しの綺麗な湯。無駄に広い浴場の中央に、お約束のアンドロメダ姫の彫像が……

ナイロンタオルを泡立て、そろりそろりと背中を洗う……と、言うより、さする……

「あはははは……くすぐったいよ……」

「はわわわ……す……すみません！！」

「いいよ……無理しなくても……」

イチャイチャと言うより、ドギマギしているバカップル。

「ち……力、足りてます？」

「いいよ、ソフトタッチも好きだから……」

ふ……っとした瞬間、二人の右手が重なった。

「はっ！！」

「！！！！」

二人の頬が、瞬時に赤くなる……って、今さら新婚夫婦じゃない訳だし……書いている作者が照れくさいわい！！

「そ……その……わた……私……こう言うの……慣れていないので……」

「慣れていないところが、可愛いさ……」

「あ……ありがとうございます……です……」

恋愛ゲームとは無縁の世界で、ぎこちなく愛を育てた二人……『妖魔滅殺【めっさつ】』と言う、洗脳に近い教育を受けながらも、辛うじて、ヒトとしての温かみだけは、はく奪されなかったようだ。特に、由真は……

「こ……こっちも……その……俺……わた……私は戦闘バカだから……」

石井長官も、今日はやけに声が上ずっている。

「……私は……戦闘能力しか、ない。恩師の奥田次官と違い、人望も、ない……ついてくるのは、橋本のような変人しかいないようで……時々、自分が情けなくなる……」

「そうでしょうか…あなたさまは、とても素敵なお方です…」
「ははは…お前しか言わないよ、そんな優しいセリフ…」
「いいえ、本当に…あなたさまは…素敵です…」
ぎこちないセリフの応酬は、互いに純真だからこそ…都会のどこのラブゲームとは、思い切りかけ離れた世界であった。
「…お前のそう言うところ…大好き…」
くると後ろを振り返り、照れくさそうに由真を見た。
「石井さま…」
天然温泉の湯気が、二人を優しく包み込む。
「愛している…心から…」
石井長官は、ゆっくり腕を広げて、小さな身体を抱きしめた。

最終章？その頃の橋本は…

「いーーーーーなーーーーーいーーーー、石井さまが、私の敬愛する石井さまが、何処にもいなーーーーーい！！」
橋本次官・36歳。目が覚めたら、敬愛する長官の姿が、こつ然と消えていた…
「ど~~~~~こお~~~~~にもいな~~~~~い~~~~~長官があ~~~~~いい~~~~~ない~~~~~やあ~~~~~さあ~~~~~しい~~~~~瞳があああ~~~~~見えな~~~~~いい~~~~~いい~~~~~！！」
呪詛まがいの歌を口ずさみながら、広い九州ブロックをさまよう次官。昼間からメチャクチャ怖い！！正午のホラー映画か！？
どうでもいいけど、橋本冬彦・特等隊員…こちらの目玉も、黄金の万霊眼である。
「おこんにちは、橋本次官…」
周りの女性隊員たちが逃げる中、美貌の花岡ゆきのが、声をかけた。妖魔退治の現場では、一番度胸が据わっていると、いなとか？
「うふふ…我がブロックの斬り込み隊長は、私でえ〜す〜♥」
さすが、戦闘民…の、るつぼだ。
「おやおやおや、君は確か、准上等隊員ではないですか？」
セミロングの髪を下ろした彼女の、優しい営業用スマイル。普通の男子ならば、コロンと、ハートを撃ち抜かれるが…
「は~~~~っはっはっはっ…確かにあなたは美人である！！だが、その程度の誘惑では、わたくしの崇高なる信仰心に、傷ひとつ入りませんのことですよ！！」
変態橋本の前に、彼女の美貌も無駄であった。
(…べつに、てめえの信仰なんざ、どうでもいいわ！！)
天使の微笑みに悪魔の本音。殴りたいけど、こいつは上官。拳をぐっと握りしめて、殺意を耐える乙女の姿…
「それより…わたくしの敬愛する石井長官さまは、今、いずこに！？」
「あれ？おいてけぼりですか？お気の毒ですこと…おほほほ…」
「はうっ！！！！」
さわやかな笑顔で、致命傷を与える。さすがは、九州妖魔の斬りこみ隊長だ。
「お嬢…それくらいにしてやれや…」
と、ここで奥田が現れた。隣に居るのは、高倉ドクターと、紅 上等隊員。
「またしても美形が出たな！！！！」
いきなり、紅を指さし、妄言をブチかます。
「貴様も確かに美形だ！！だが、我が崇高なる石井さまへの信仰心は、少しも揺るぎはしませんぞ！！」
「…何が言いたいのですか？この人？」
目をパチクリさせて、奥田次官に尋ねる。
「…気にするな、紅…こいつアホだから。」
ストレートに、妄言をスルー。

「あー、橋本特等隊員殿…石井長官なら、温泉だぞ。」
奥田次官、変態にも動じずに返答した。
「どーこーのおおおおおおお！？」
ブンブンブンブン…奥田次官の両肩を掴み、前後左右に揺さぶりまくる。
「ええっと…福岡県阿修羅郡犬鳴村夜叉乃滝温泉って、言っていたな…」
さりげなく、高倉ドクターが偽情報を流す…
「ええい、貴様は確か、石井さまの大親友とか！？だけど…わたくしは負けません！！」
「落ち着いてください…それより、着替えた方が…」
変態のパワハラにも負けないタフなドクターが、落ち着くようにさとす。
「はっ、こうしてはいられない！！早く石井さまをお迎えしなければ！！車を貸せ！！」
「ほい、これを…」
至極冷静なドクターは、そっと車のキーを差し出した。
「奥田次官、また後で！！」
着替えもそこそこに、橋本次官は基地を飛び出した。
…九州ブロック面々の、冷ややかな視線にも気づかずに…

もちろん…本物の石井長官は、可憐な慰安婦と混浴した後、冷たいシャーベットをごちそうになった事だけは記しておく…はふんっ…

第二話 了。